# 小説おはなはん（第三部）

小野田

NHK連続TV小説
「おはなはん」より

# 小説おはなはん（第三部）

小野田勇

小説おはなはん（第三部）検印廃止
定価　二九〇円
昭和四十二年三月二十五日印刷
昭和四十二年四月　十　日発行
著者　小野田　勇
カバー題字　島田しづ
印刷者　東銀座印刷出版KK
発行者　大橋恭彦
発行所　映画芸術社
東京都中央区築地二の五
電話（五四二）一八七三
振替　東京　六三七九一

撃剣大会で勝ち残った謙一郎を道場に訪ねたおはなはん。

こうして他人の中へ出してみると謙一郎は目立ってしっかりしているように見えた。（小学校入学）

ひげカツの店の前で……（スナップ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

御徒町に借家ながら一戸を構えた。産婆としての独立第一日であった。

謙一郎がケガをしたという知らせを受けて小学校へ駈けつけた。（スナップ）

ひげカツの焼け跡（大震災）を訪ねた。おとくは放心状態にあった。

「書くのはいいけどどうするの」「貼るのよ電柱に」母子はおそくまで産婆の文字を書き続けた。

謙一郎が出場する撃剣試合へ弘恵もぜひ見にゆくといった。

嫁ぐ日の前日。弘恵と二人、静かな寺の庭を飽かず眺めた。

弘恵の結婚式には三雲が父の代りに列席してくれた。

「こんな偉い先生に花嫁側に坐ってもらったら五光が射しちやいますよ」とおとく。

上海陥落を謙一郎の書いた記事で知る由起子と……。

大作は上京して弘前ゆきを今日もすすめるのだが……。

大学を追われたという加賀を同郷人として慰さめて上げた。

食糧事情は日増しに悪くなった。六平に案内されて買出しに…。

昭和二十年、東京の家を焼かれたおはなはんは大作を頼って疎開した。

疎開地の小学生相手に楽しい田園生活の一日。

東北にも空襲があった。弘前で終戦の日を迎えた。

18才から82才までのおはなはんを演じた素顔の樫山文枝さん。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

# 小説おはなはん（第三部）

# 目次（第三部）

長男・謙一郎……13
正太の恋文……36
母娘競走……55
亀吉の死……80
かけ出し記者……103
再会……127
雪の夜明け……154
暗い銃後……173

終戦のあとさき……192
廃墟に帰る……218
明治百年……241

―完―

カバー・題字　島田しづ（在パリ）

# 長男・謙一郎

大正二年――

三雲圭介の求婚を泣いて辞退したおはなはんのその後の生活は、速水の忘れ形見、謙一郎と弘恵の母としての明け暮れの連続であった。

子供たちを寝かしつけたあとのひとときなど、話し相手もなくひっそりと、冷えた番茶をすすりながら、おはなはんは愚痴ひとつこぼすでもなく、甘ったれて冗談を言える相手もない毎日を考えて、ひしひしと迫る孤独感に胸を絞ぼられる夜がなかったわけではない。

同じ年代の子供づれ夫婦の姿を見れば、父親の愛を知らない子供への不憫さに、溜め息のもれる日も何度かあった。そして、女としての楽しさを自らひきちぎるように思い切った自分の不幸よりも、片親に育てられる謙一郎たちの不運を哀れむ気持ちがすぐ先に立って、おはなはんは、少しづつ自分でもこんなに強いことを言える人間だったか知らと驚くほど意志的な女に

成長して行った。

とりわけ憎まれざかりの謙一郎には父親代りのしつけを心がけなければならなかったし、それでいて女親育ちのひがみっぽい子にはしたくないと常日ごろ頭を痛めていた。

産婆を女ひとりの家計を立ててゆく上の職業として、経験もないままに看板を出してみて思いがけないほどの忙しさにおはなはんは驚いた。嬉しい事に、その忙しさに比例して、日増しに収入も殖えていったし、女医学校での知識が、大きく役に立った。最近ではひとかどの助産婦としての自信も身につけるようになっていた。

細倉夫婦との共同生活にも、お互の遠慮や気兼ねがあったので、それとなしに借家を探していたが、やっと下谷御徒町に一戸建てを見つけて引越すことにした。ちょうどその借家と背中合せの裏の小路に、亀吉たちのひげカツの店にふさわしい表が平土間になっている二階家もみつかった。亀吉夫婦は一日おくれて引越しを終った。

この日、小学校へ上る謙一郎の支度におはなはんは早朝からいそがしい思いをした。

昨夜おそく陣痛を訴えていた中根さんの予定日でもあった。

木綿の紺絣に小倉の袴をはかせてもらって、すっかり小学生らしくなった謙一郎が階段を降



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton